

氏名	和田 宙土
ヨミガナ	ワダ ヒト
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第697号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	（論文）「グロテスク」の潜む身体—生命化する流体模様 （作品）・生生・形象-02「祈」・形象-04「怒」・形象-05「婦」・形象-06 「星」

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	植田 一穂
（論文第1副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 道信
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	海老 洋

（論文内容の要旨）

本論文は、描かれる墨の流体模様「グロテスク」を潜ませることで、生命の美しさを表現する制作動機とプロセスを論じるものである。

私は、眺めていた水中の墨模様が偶然、人間の形を模した瞬間、生命が宿ったように感じた。やがて消えるその模様は、私が幼少期に感じた生命の美しさと呼び起こした。それは、当時飼育していた生物の生死を幾度となく目の当たりにしたことで、生きている物をより美しく輝かせるのは死骸の存在であることに気づき、いわば生命の内に相反する美を見た感動だった。死骸が美しいのではなく、生と死を併せ持つ生命が美しいと思えたのである。その脳裏に焼き付いた感動の再来が、無意識に私を制作へと向かわせた。

絵画に、見えないものを見えるようにする意義があるとするなら、私は生でもあり死でもある纏（もつ）れの美しさを描きたいと考えている。私は内に潜む「グロテスク」を描くことで、それを表そうとしているのである。

グロテスク表現に共通する点として、生命の消失感を挙げたい。「グロテスク」は今まさに生命が失われようとする瞬間であり、私が描きたい纏れと一致するところが多い。しかし単に「グロテスク」だけでは、美しさは薄れ、恐怖を感じさせるものとして見られてしまう。そこで、人型の墨模様に生命の美しさを見出したような感情移入を利用し、グロテスクなものを観者の内面に潜ませることで、私が感じる生命の美しさを表現できるのではないかと考えるに至った。

本論文はその創作論であり、次の3章からなる。

第1章『「グロテスク」の定義』では、自身の「グロテスク」の定義と自作品とのかかわりを考察した。第1節『「グロテスク」の意味』では、様々な作品に見る不快表現からグロテスク表現を分類し、私自身が感じる「グロテスク」の視覚化について論じた。またそれに基づいて、グロテスク表現に生命の消失、一定の細かさ、うごめく流動的な線という共通項を指摘し、それぞれをヴォルフガング・カイザーが考察

する「グロテスク」の定義から考察した。第2節『「グロテスク」と血液』では、「グロテスク」が不快表現の中でどの位置にあるのかを図解化し、様々な作品中にみられる血液の質感の違いが不快表現のどこに分類されるのかを示した。その上で、水中の流体模様の形状が赤色を帯びることで、「グロテスク」を示唆できる可能性を考察した。

第2章「身体表現」では、自作品における身体表現の形成の根拠と、その方法について述べた。第1節「身体表現の形成」では、「グロテスク」を成立させるために、流体模様に顔と身体が必要であること、そしてそれを出現させる方法について考察した。ジョルジョ・デ・キリコのマネキンが描かれた作品を例に、対象と自身を融合させる感情移入が、墨模様から「グロテスク」な身体を見出す条件であることを述べた。第2節「無意識と身体表現」では、制作中に行われる偶然の必然化が、無意識の制作動機である生命への表現欲求と結びついていることを明らかにした。また、そこでの身体表現が生み出す「残留物」が、「グロテスク」とどのような関係にあるのか考察した。

第3章「提出作品」では、第1章で定義した「グロテスク」と第2章で示した「グロテスク」な身体を、美しい生命の表現へと昇華させる試みについて、提出作品を中心に論じた。第1節『「グロテスク」の潜む身体』では、自身の原体験や庵野秀明、フランシス・ベーコンなどの作品に潜む、「グロテスク」と美の関係を考察した。第2節「生命化する流体模様」では、「グロテスク」の潜む身体とするために、提出作品に使用した色彩、画材の考察を中心に、流体模様の生命化について論じた。

終章では、この纏れる身体表現が、絡み合う伏羲と女媧を模していた可能性と、さらなる発展を遂げる余地に関して述べた。

(論文審査結果の要旨)

本論文は、墨流しの流体模様に一瞬現れる人の形を捉え、そこに「グロテスク」と美を表現しようとする筆者の創作論である。

筆者は、生と死、美とグロテスクなど、相反するものに裏打ちされてこそ生や美が輝くと考えている。当初の論文テーマは「纏（もつ）れ」で、それが「グロテスク」に変わったことで審査側もとまどったが、最終的には生と死、美とグロテスクがもつれた状態の表現が、筆者の志向する世界であることが明らかになる。またモチーフとしては一貫して人の形が用いられており、墨模様がつくりだす一瞬の形に、存在と非存在のもつれを見出そうとしていることが分かる。

第1章「『グロテスク』の定義」では、本来の「グロテスク」の定義と、筆者が感じる「グロテスク」表現について説明する。ここで筆者が感じる「グロテスク」の分析では、血の質感による印象の違いや、生命の消失、一定の細かさ、うごめく流動的な線といった要因など、制作者の立場から見た独特な分析が展開されている。また墨流しの流体模様を、赤に色変換して絵画化するのも、赤の色彩がもたらす興奮や苛立ちに、グロテスクを生む効果を求めていることが明らかにされている。

第2章「身体表現」では、墨流しの流体模様に、生命が宿っているような感覚を筆者が覚え、同時に手足がもがれた様子や、肉体が溶け出していくような感覚を受けることを述べる。同様の印象を受ける事例として、シュールレアリスムのキリコやエルンスト、ダリなどをあげて説明し、自身の墨模様からの作品化も、偶然や無意識の必然化であることを説明する。

第3章「提出作品」では、こうした筆者の「グロテスク」の原体験として、幼少期の昆虫遊びや、廃屋、庵野秀明「エヴァンゲリオン」の妖しい美をたたえた破壊シーンなどに言及。そして提出作品「形象 — 02『祈』」「形象 — 04『怒』」「形象 — 05『婦』」「形象 — 06『星』」について説明している。

論文作成の進行と同様、筆者の作品もこの一年で大きく変化し、洗練されたものへと変わってきている。論文のテーマとしても、「グロテスク」と美に並んで、それらが「纏れ」る様態が一貫した伏線となっていることが分かる。学位にふさわしい独特な感性の論文として、審査会の好評を得た。

(作品審査結果の要旨)

本論文は、芸術作品における美に潜むグロテスクについて申請者の定義と分析及び、それらを自作品に発揮する過程を論じたものである。

グロテスク絵画と聞けば、モチーフや色合わせによる不気味さや気持ち悪さといった目に見える表現部分を意識するが、本論ではグロテスクを単純な不気味、恐怖、不快といったものとは区別し分析している。制作ではモチーフや単純な色彩のみではなく、線描、色彩の励起発現、静止している絵画表現から受けとる速度にも注視し、それらに“生命”と“死”を重ねて論考、制作を進めている点が興味深い。

論文中に甲斐荘楠音と村上華岳の人物画が比較されている。申請者は華岳の線描に楠音にはないスピード感を見出し、そこに硬質さと軽快感というポジティブな表現を感じる一方、楠音作品からは流体的な重さ、つまり低速でストロークの長い線描からは「肉体と精神の纏れ」という執拗な「病み」のエネルギーを感じ取れると語っている。また、楠音の別作品で用いられる線描や墨の濃淡表現と、自らが実験した水中の流体模様との相似性について、特に粒度や粘度の差による水中での流体の落下速度に起因する形状に着目している。

提出作品は、グロテスク、死といった言葉から連想されるおどろおどろしい画面ではなく、作品としてはいっそ美しいとも言える人物表現である。制作方法は水中に墨液を落とした際の流体模様を写真撮影しデジタル処理をした画像を基に、血液を想起させる蛍光色のマゼンダで細密に描画したものである。デジタル画像が発端ではあるが作品は厳然と絵画であり、写真に代替できない伝統的日本画技法で描かれている。描画はアクリルや水彩のようにフラットに見えるが、近接すると岩絵具のピグメントとしての特徴を積極的に用いた表現が見られる。制作方法について文中にも語られるが、粒度の荒い岩絵具の粒子間の大小の隙間に墨やインク等粒度の細かい絵具が入り込んでゆく様相は不確定で、ともすると失敗を誘発する要因ともなるが、偶発性は制作にとって不可欠な一要素としている。

申請者は自身のグロテスク表現に線描、蛍光色、偶発性、そして前述した速度という要因の必要性を挙げ、それぞれの要因自身が獲得し、かつ失うものを“生命”とし、その生死が画面に発揮されることで絵画の美に潜むグロテスクが発現するとしている。

絵画を語る際に生死を重ねることは少なくない。「生きた線・色」「モチーフが死んでいる」と様々あるが、本論では単にレトリックではなく、物理特性による素材の個性や流体の振舞いの偶発性、蛍光色の励起発光とその発光寿命といった、申請者が実感した絵画を構成する物質や構造から受け取る“生命”とその“死”についての記述であり、それらを表現した提出作品は、申請者の考察が十分に発揮された優れたものであると考える。

制作に於ける日本画技法や、材料研究は高い水準のものであると認められる。

審査会においては、審査員全員が一連の作品を学位にふさわしいものとして評価、判断し合格とした。

(総合審査結果の要旨)

申請者は幼少期、昆虫や両生類等多くの生物を飼育した経験を持つ。その体験の中で、飼育していた生物の死を幾度となく目の当たりにし、生命は生と死を合わせもつからこそ美しいのだと思えるようになった。ある時、申請者が水中に垂らした墨を眺めていた時、その模様の中に偶然人の形を見つけ、そこに生命が宿ったように感じたという。やがて消えるその模様が、幼少期に感じた生命の美しさを呼び起こさせ、生と死を併せ持つからこそ美しい生命の美を、絵画制作において表現したいと考えるようになる。単純な美しさではなく、その中に「グロテスク」を潜ませることで、申請者が感じる相反する纏れの美を表現できるのではないかと思に至る。以上が提出作品制作の動機であり、論文はその過程を論じた制作論である。論文は3章から構成されている。第1章は「グロテスク」の定義と自作品とのかかわりを考察し、「グロテスク」の視覚化について論じる。2章では身体表現の形成の根拠と、その方法について述べ、3章では提出作

品について、使用した色彩、画材の考察を中心に流体模様の生命化について述べている。一般に「グロテスク」という語感からは不気味さや気持ち悪さといった印象を持つ。しかし申請者の提出作品からは不快な要素はあまり感じられない。「グロテスクを潜ませる」という提出作品の印象と論文の間で齟齬が生じるのではないかという指摘もあったが、「グロテスク」に対する申請者独自の解釈とし、論文全体として申請者の考察が十分に発揮されている点が評価された。

提出作品は大作を含む5点である。偶然できた流体模様の中から人体に見える形を抽出する制作方法は一貫している。当初の作品では、人型が分かり過ぎるためかえって鑑賞者の想像力を阻害する結果になりはしないかと危惧したが、提出作品「形象—06『星』」においてはその点が解消され、また支持体を和紙から絹本にしたことで色彩の彩度が増し、申請者の意図がより明確になった。審査員全員の評価も高く質の高い作品となった。日本画の技法や材料研究も高い水準のものと認められる。

以上の点から審査会においては、審査員全員の評価と承認を得、学位にふさわしい論文と作品であると判断し合格とした。